

『花園院宸記』の世界

—鎌倉末期の激動を直視した天皇の証言—

花園天皇（1297～1348/在位 1308～1318）は自筆の日記をのこした。その原本は、長く伏見宮家に伝存し、現在は宮内庁書陵部に所蔵されている。

一部欠巻（年月）が存在するが、延慶3（1310）年10月から元弘元（1332）年11月に至る23年間の記事がある。時代は鎌倉時代の末期、寺社の強訴はやむことを知らず、花園の譲位をうけて即位した帝（後醍醐院）による鎌倉幕府打倒計画が進んでいく、そんな激動期を直視し、冷徹に事態を分析して論評する場面も少なくない。

その一方で、王家の伝統を基盤としながら、花園自身も知的快樂の場を好み、日記にはさまざまな文芸活動の記録も載る。

さて、奈良大学図書館では、その原本を忠実に複製した『花園院宸記』全35巻（思文閣出版）を昨年度までに購入、整備した。すでに、その史料的重要性から、『列聖全集』、『増補史料大成』、『史料纂集』などの刊本が普及しているが、墨色や筆勢、添削の跡など、原本からでなければ得られない情報はきわめて多数、多彩である。

今回は、全35巻のなかからテーマの異なる記事を載せる11巻を選んで展示した。日記を通じて花園院の人物像に触れる機縁を開くことができているら幸いである。

2019年7月 展示担当史学科有志